



## 「東アジア スタディツアー」プログラムの基盤整備 報告

著者	嶋田 彩司, 徐 正敏, 渡辺 祐子
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2017
ページ	29-31
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/00003403">http://hdl.handle.net/10723/00003403</a>

# 「東アジア スタディツアー」 プログラムの基盤整備 報告

プロジェクトメンバー：嶋田彩司\*、徐正敏、渡辺祐子（\*：代表者）

本研究プロジェクトの目的は、2018年度から新規科目「東アジア スタディツアー」の開講を目指して、学生を引率するフィールド予定地を事前に訪問調査することである（参考までに本報告の末尾に申請時に掲げたプロジェクトの目的を添付する）。

本学の韓国留学生とともに韓国を訪問した昨年に引き続き、今年度は台湾留学生3名とともにプロジェクトメンバーの嶋田、徐、渡辺が下記の日程で台湾での事前調査を行った。同行した台湾留学生は以下の通り。

陳冠吾 経済学部3年  
高振威 国際学部2年  
葉唐昀 国際学部2年

## 8月2日（水）

成田発BRI07便にて高雄空港着。台南に移動。

## 8月3日（木）

午前中台湾烏脚病医療記念館（台南市北門区）を訪問。2013年、本学は植民地台湾から明治学院中学に留学した王金河氏に、かつてこの地区に蔓延し多くの人々の命を奪った風土病烏脚病の治療と撲滅に寄与したことをたたえて名誉博士号を授与した。現在、王氏が烏脚病患者を治療した病院と元患者の社会復帰のための施設が、王氏の遺族によって記念館として運営されている。私たちの訪問予定を知ったご遺族の方々は、お忙しいスケジュールをやりくりしてわざわざ駆けつけてくださり、私たちのために特別の講義もしてくださった。

訪問者一同は、本学のスクールモットーを文字通り体現した王氏の足跡をたどることは、学生たちにとって大きな教育効果をもたらすものであることを確信し、台湾ツアーが実現した暁には必ず引率すべき場所であることを確認した。

午後長栄大学（台南市歸仁区）を訪問。同大学は、生前の王金河氏が創設にかかわり理事も務めていたキリスト教大学で、台湾長老教会と最も深い関係を保っている。教派的背景から、本学とも親和性の高い大学といえる。プロジェクトメンバーの渡辺は2016年10月にバリ島で開催されたACUCA（アジアキリスト教大学連合）の会議で同大学の学長、副学長、神学部教授と面会しており、その際ぜひとも明学との交流を進めたいとの積極的な申し出を受けていた。今回あわただしい訪問であったにもかかわらず、以下の方々との面談を行うことができた。

黄伯和教授（副学長・神学部）

李敏瑜 助理教授（国際交流局部長）  
 劉芳初 助理教授（渉外担当）  
 邱惠琪 氏（学生交流プログラム担当）  
 武知正晃 氏（留学生の教育プログラム担当）

小一時間ほどのやり取りを行い、スタディツアーの授業が開始され台湾が訪問先となった際には、学生を積極的に受け入れてくださること、今後両校の交流プログラムの実現を目指すことが確認された。

### 8月4日（金）

台南発、台北着。東吾大学訪問。同大学は本学とすでに交換留学の提携を結んでおり、他学部の教員が学生を引率して訪問している大学でもある。ちょうど経済学部の西原博之教授がサバティカルで同大学に滞在中で、同大学で日本語の教鞭をとる長田正民氏（本学社会学部卒）とともに、私たちを迎えてくださった。本学学生が訪問する際の交流プログラムの様子を中心に長田氏からレクチャーを受けた。

### 8月5日（土）

午前中、台湾の元従軍「慰安婦」のおばあさんたちを記憶するための「阿媽之家 おばあさんの家」を訪問。「慰安婦」問題は日韓関係の懸案としてのみとらえられることが多いが、台湾にも日本軍の性奴隷とされた女性たちがいることを学生たちに知ってもらい、台湾の植民地支配について考えてもらうために、当記念館もスタディツアー訪問先に加えるべきであるとの認識で一致した。

午後の便で帰国。学生3名はそれぞれ実家に帰省するため台湾にとどまった。

以上

### 「東アジア スタディツアー」プログラムの基盤整備 プロジェクトの概要

提案者は、教養教育センターを中心とする本学教職員の助力を得て、東アジアへのスタディツアーを実現したいと考えている。韓国、中国等とのあいだで政治的な、そしてときには文化的な軋轢が長く続いている現今にこそ、他者理解と相互承認のための異文化体験が重要な意味を持ち得る。正課・課外のプログラムを利用した外国語学習とアジアの歴史、宗教、文化に関わる知見の獲得を背景として、現地に出向き、人々とふれあい、言葉を交わすことが今こそ必要であり、それはまた本学が目指すべき教養教育のひとつのかたち（「現場」と「教室」の往還）でもあらうと考える。

本プロジェクトは、上記の「サービスマーケティング・プログラム」を実現するための基盤的理論研究と実際的な準備作業を内容とする。基盤的な理論については、教員相互が日常的に研究情報を交換しつつ所定の会議等において討議することによって、プログラムの目的を共有することにつなげてゆく。実際的な準備作業については、旅程の立案、現地施設等との交渉、参加者の募集と事前学習等々多岐にわたるが、その実務については本学の正規留学生を事務補助者として任用し、専任教員が指導しながら具体的な計画を整えてゆく。

なお、現時点では、ツアーの行き先は韓国、中国、台湾等が候補となる。ツアー・プログラムには、現地でのボランティア活動や同世代の学生等との対話経験などが含まれる。また、将来的には高校生同士の交流等にも、本プログラムのノウハウが引き継がれてゆくことを想定しているが、これが実現するなら、本プログラムは教養教育センターの一活動を超えて、ひろく明治学院全体の教育事業に発展し得るものと考えている。

そのためにも、本プロジェクトを利用して、安全かつ長期的な継続が可能なプログラムの開発をめざしたい。具体的には、2016年度の韓国に引き続き、2017年度は台湾を訪れ、予備調査的な現地視察や諸準備と関係教員の研究会を開催して、スタディツアーのプランをいっそう発展充実させたい。そのうえで、2018年度以降に本調査の開始を目指したいと考えている。